高等小学校の記録を見ると、明治三十二年の一月、職員会議の結果、本校の男子生徒をもって中隊を編成し、毎土曜日に、校長若しくは首席訓導が指揮して教練を行なうことにした。また、通常号鐘、非常号鐘の打ち方を定めて、集合訓練を厳格にすることをきめた。とある。

このころから軍国調のきざしが始まったのであろう。

「唱歌は廿五年頃から正課となり、廿九年頃に今のオルガンが来たが、それ迄は手風琴で、今のオイチニの薬売の様な工合に弾いて、唱歌を教えていたのである。」

オルガンが始めて学校で使用されるようになったのは、明治二十八、九年ごろらしい。それまでは手風琴の時代が相当長く、南海部郡高等小学校の開校当時は、普通の琴で伴奏していたという。

明治二十六年の一月の新年式から、県の訓令によって小学校祝日大祭日儀式順序にしたがって挙式することになり、その時に歌う祝祭日の歌詞と楽譜が決まった。この式日唱歌が制定される前は、式日に「春は弥生」など歌わせていたとのことである。

唱歌は高等小学校ではじめられ、尋常小学校ではずっと後のことであったという。唱歌が正科として入れられたころの唱歌は、「春は弥生」「霞か雲か」「白蓮」「白菊」などで、「奈良の都」に至っては、最高のものであったといわれている。

「別に寄宿舎があって何時も数十名の健男児が、夏は蚤に喰はれ、平釜にこげつくこげの分配など、頗る面白い生活があったが畧す。以上これまでが今年から所謂霊覚として、母校の同窓会に出席する様になった連中であるのだ。」

この物語に出る人は勿論、この伝説めいた話を知っている人は、今は殆とんどいないであろう。この書残された物語で、明治初期に於ける学校教育の状況を想像するより他にない。

（おわり）

（おわび）編集者、うかつにも前号標題を「明治初期の学校、教育」としました。それは誤りで、今号のように「――佐伯教育」でありました。ご訂正下さい。相すみませんことでした。

（羽柴）

研究

緒方姓について

会員　佐藤　貫一

（福岡市在住）

さきに帰郷したさい、所用があって南海病院を訪れ、緒方保之院長にお会いしたが、そのとき話がたまたま「緒方」の姓のことに及び、緒方院長が佐賀県のご出身で、生家は四百石どりの旧鍋島藩士、葉隠れの士風をうけた家柄の人であることを知った。

そこで思い出したのは「緒方」の姓が、とくに豊後だけでなく、豊前、筑前、筑後、肥前、肥後、日向の七国にまたがって分布しているという事実と、さらに惟栄が配流されたという上野（こうずけ）が沼田を軸にする、関東、東北地方にもあること、また伊佐氏の子孫という人々のなかに、緒方氏を称する家（緒方洪庵一族）があることなどで、これらのほとんどが緒方惟栄を祖としていることである。

もっとも「おがた」氏のなかには尾形、緒形などと書く家もあるが、宇佐盤の尾形氏以外は、姫（ひめ）伝承に類する竜蛇説話を伝えており、犬神（いぬがみ）姓緒方氏と同系に見られている。宇佐姓尾形氏というのは、宇佐八幡宮の神人で

ある、宇佐宿禰諸基の子諸保を祖とする氏で、宇佐氏の分れである。

尾形氏で著名なのは、京都鷹ヶ峰から出た貞享、元禄期の町衆芸術家（装飾画家）緒形光琳、乾山の兄弟で、この緒形家は雁金屋といって、慶長のころから東福門院（後水尾天皇中宮、徳川秀忠の女和子）の御用をつとめた呉服師であった。光琳の曾祖父尾形道伯は、豊後の緒方惟栄の裔と称した。また尾形氏には、福岡藩黒田家のお抱え画師尾形善白家がある。この尾形氏にも惟栄裔という伝承があると聞いた。

さて緒方氏の始祖である緒方惟栄であるが、佐伯史談第九十七号に「平家物語と緒方惟栄」という題目で卑見をのべたように、惟栄は豊後大神氏（宇佐大神氏でなく、大野大神氏）の族長として、大野郡緒方荘を中心にした大野、海部、大分、直入各郡の根拠地に、活躍した土豪武士の頭領であるが、時あたかも平安貴族政治が院政となり、やがて武家である平氏政権が勃興し、源平覇の時代となったころ、武力を持った土豪が、荘園の名主として勢力を養った。惟栄もまたその一人である。

平家物語に「かの緒方三郎は小松殿の御家人なり」とあるように、惟栄は小松内府平重盛の家人（家来）であった。もとより惟栄は大野郡緒方荘の名主で、其の兄惟隆は海部郡臼杵荘、弟惟憲は海部郡佐知郷に拠って、それぞれ名主の地位を確保していた。

保元三年（一一五八）八月、平清盛は大宰大貳に任ぜられ、父祖以来の西国における平氏の覇権を確立したが、そのとき家人越中次郎兵衛盛嗣に命じて、豊前国川部郡香春岳中腹に、鬼ヶ岳城（また鬼ヶ城ともいう）を築いたという。ところが豊前国には宇佐神領（宇佐宮弥勒寺の荘園）が多く、在庁官人として土着した板井種久の子種遠が、宇佐大宮司公通の婿家となって、京都郡城井の神楽城に據り、築上、京都、田川各郡に所領（宇佐神領の支配）をひろげた。一方、平氏政権は筑前の原田氏や山鹿氏をその与党としたので、原田氏の支族である板井氏は、宇佐大宮司との縁故もあって平氏与党となった。かくて豊前国は全面的に平氏のものとなり、平重盛の知行国とされた。

緒方惟栄は平重盛の家人であった。平治元年（一一五九）九月、宇佐大宮司公通が豊前守に任ぜられると、翌二年緒方惟栄は子惟時とともに鬼ヶ岳城に入って、平氏知行地の支配をした。

ここで大神姓佐伯氏系図をひらいて見よう。緒方氏は緒方三郎惟栄が中心で、惟栄に六子があるが、緒方氏を名乗ったのは、長男緒方小太郎惟久と、五男刑部丞惟時の二人である。次男は野尻次郎惟村、三男は直入三郎惟友、四男は高野四郎惟重、そして五男が惟時（五郎か）、六男は沼田四郎惟兼となっているから、沼田配流中に生れた人であろう。惟栄の六子のうち、輩行（次郎、三郎などの順序名乗）のないのは五男惟時だけで、彼には刑部丞という通称と、豊前国鬼ヶ城主という書きこみがある。こうした記載から推察すると、惟時の母は明らかでないが、おそらく惟栄の正妻で、惟時は惟栄の嫡子であったのであろう。

明くる十二日（注、治承五年二月一二八〇）鎮西より飛脚到来、宇佐大宮司公通が申しけるは、鎮西の者共、緒方三郎維義を始めとして、臼杵、戸次、松浦党にいたるまで、一同平家に背いて、源氏に同心の由申したり。

（平家物語 巻六）

平氏全盛の二十年間、その家人として豊前・豊後地方の一大勢力であった緒方惟栄は、どうした風の吹きまわ

しか、源氏の旗上げに一味して、肥後の菊池隆直と共に兵をあげ、平氏恩顧の大宰府官人原田種直と戦った。この戦は原田方に利があり、菊池は破れて肥後の菊池城に籠り、惟栄は退いて豊後の本拠に引上げた。この惟栄の挙兵は、平氏政権に対する御家人の謀叛であるが、その決起の理由は何か、全く判然としない。ただ考えられるのは、治承五年二月の挙兵に先立つ治承三年七月、惟栄が主君と仰いだ平重盛が病没し、以来清盛入道浮海の専横が激しく、平氏に非ざれば人に非ずといわれて、一門の知行国は全国の過半におよんだことで、これまで小松内府（重盛）の御家人として豊前国を支配していた惟栄の地位がゆらぎ、平氏政権に直属する宇佐氏や板井氏が優勢になり、豊前全域の支配権を握るようになったためではなかろうか。

とまれ惟栄は治承五年二月の決起後、豊後の本拠（大野、直入、海部、大分各郡）を守って動かなかったが、寿永二年（一一八三）八月、木曽義仲に京都を追われた平家一門が、安徳天皇を奉じて大宰府に落ちてきたので、豊後国司藤原頼資の命を院宣と称して、大宰府を攻め、ついにこれを九州から追い出した。やがて豊前に進攻した惟栄は、一族の加来小太郎を宇佐郡高森城に、大神三郎惟貞（佐伯惟貞ともいう）を下毛郡犬丸城に入れて、宇佐大宮司家や板井種遠の拠点を圧迫した。翌元暦元年（一一八四）七月六日、宇佐宮に侵入した惟栄。惟隆らは、神殿を焼討ちして神宝や古文書を奪い取った。また同二年正月、平氏討伐のため長門にあった源範頼に兵船八十二艘を献上して、範頼軍を豊後に上陸させ、惟栄自らこれを先導して原田種直、山鹿秀遠、板井種遠らを討ち、平軍の後背を扼して、義経軍の壇ノ浦における決戦を容易にした。このとき惟栄の一族緒方九郎が、京都郡の馬岳城に拠ったといわれる。

文治二年（一一八六）十一月、惟栄をはじめ惟隆（四郎）・惟憲（佐加）の兄弟は、宇佐宮焼亡の罪を問われ、それぞれ流罪に処せられたが、惟栄は上野国沼田に配流された。しかし文治五年（一一八九）源義経が衣川に滅び、鎌倉幕府の威令が奥州におよぶことになると、改めて平氏討伐の功によって罪を赦され、郷国豊後に帰ったが、すでに豊後国は関東御分国として源頼朝の知行国となっており、頼朝腹心の藤原季光（毛呂太郎）が国司として赴任していた。もはや緒方一族には昔日の盛運はなかった。惟栄は従弟にあたる佐伯惟康の所領である佐伯荘に居住したという。

以上がだいたい史上に見える緒方惟栄の行跡であるが、緒方一族は惟栄の服罪によって各地に四散し、その死によってさらに流遷し、あるいは帰農して庶民の中に入ったのである。そのことは緒方氏が鎌倉時代初期に史上から消え、天正・慶長年代に再現していることで、現在私たちが見ることができる緒方姓系譜の多くは、惟栄から慶長年代あるいは江戸時代中期までが空白になっている。

佐伯史談第九十八号（前号）に山香町の伊東利氏が書いておられる、馬上八幡境内にある緒方惟栄の墓（緒方大明神）とは、速見郡志に、

（緒方三郎惟栄之墓）　立石にあり。惟栄上野沼田に流され、後帰国の命を蒙る。子細あって焉に終る。

と、あるものであろう。この速見郡志は唐橋世済らが撰述した「豊後国志」の参考本になったもので、編者はわからないが、享和年代（一八〇一―一八〇三）以前に編述されたものである。ところで赦免されて帰国した惟栄が住んだという佐伯地方には、「惟栄の墓」と伝える墓塔は全くな

く、山香町立石にあるが、この墓碑は享保二十年の建立であるから、おそらく速見郡志にいう「手細あって馬に終る」の伝承によって建てられたものであろう。

最後に豊前の緒方氏について述べておこう。私の長男の嫁は福岡県豊前市横武町河原田の生れで、生家は緒方氏である。聞くところによると同部落には緒方氏が七軒あり、いずれも家紋に「三ツ鱗」を用いているという。豊前市に隣接する築上郡新吉富村には緒方の地名があり、この付近は昔の緒方荘である。「両豊記」によると、室町時代の初期から同末期戦国時代にかけて、築上郡、下毛郡地域には、加来・大神・臼杵など、緒方一族の諸氏が活動している。

（おわり）

（追記）

福岡市内およびその付近にある「おがた」姓は、だいたい緒方氏のほか、緒形・尾形・尾方・小形・小方・小県・尾潟・尾片の各氏になっている。私の集計では緒方が最も多く六〇三を数え、ついで尾形が六九、小方が四九、尾方が一四、小形一二となり、緒形、小県、尾潟、尾片は少なく、二ないし一となっている。

このうち緒方氏の多いのは福岡市と早良町（三月一日に福岡市と合併する）、それから太宰府町、大野城市、筑紫野市、春日市、志免町、古賀町などで、福岡市の南部と東部各市町に集まっている。

また福岡市付近には佐伯氏も大神氏が比較的多いが、佐伯氏は古くからの住吉神社の社家、大神氏は古くからの筥崎宮の社家の姓である。従って筑前地方の佐伯氏はおおむね大伴佐伯連から出た佐伯宿禰の裔といわれ、豊後の大神氏佐伯氏とは別系のようである。

（筆者住所）福岡市東区城浜団地八一二
佐藤医院内（郵便番号八一三）

調査

馬鎮神社の競馬会

―思い出の青山の馬とばせ―

会員　深矢勘蔵

競馬記念碑

本郡青山村鎮座馬鎮神社ハ古来伝ヘテ牛馬ノ神ト称シ毎年二回之カ祭典ヲ挙行シテ其神霊ヲ敬祀シ又陰暦正月十九日競馬会ヲ催シテ之ヲ記念シ一ハ以テ神徳ヲ銘シ一ハ以テ牛馬ノ改良ヲ奬励シ来リシガ寔ニ地ヲ字平原ニ相シ郡内十六箇町村ノ賛助ヲ得テ競馬場トナシ今歳第二次例会ニ際シテ記念碑ノ建設ヲ企テ楽矢近蔵山口庄次郎両田五郎三氏事ヲ掌リ碑成リ撰文ヲ余ニ嘱セラル依テ如上ノ由来ヲ叙シ以テ無窮ニ貽サシムト云爾

大正四年一月　佐伯中学校長　秦　政治郎撰
同　校　教　員　重田　亨書
馬鎮神社氏子建
天野磯吉　彫刻

これは、青山地区（佐伯市青山）の中央にある平原に、今は荒れ果てた競馬場を見守るかのように、堅田川を隔てた県道沿いに建っている、記念碑の碑文である。

馬鎮神社は、競馬場から約一キロ程上流、伏木川という部落にある。保食神を祭神として、「元和元年一月十